

少女雑誌の部屋から

「少女雑誌」「挿絵画家」と聞いて真っ先に思い浮かぶ人と言え、やはり中原淳一ではないでしょうか。淳一は『少女の友』の専属画家としてデビュー。挿絵のほかに表紙絵、ふろくなどを手掛けるようになると、雑誌の売り上げが大幅にあがったほどの人気ぶりで、少女たちにとってカリスマ的な存在でした。彼に憧れて挿絵画家を目指した人も少なくありません。絵だけにとどまらず、様々なジャンルで活躍した淳一。その美学は時代を超えて、今なお支持されています。



中原淳一

Nakahara Junichi

1913-1983

香川県生まれ。昭和7(1932)年に開いたフランス人形展で注目を集め、『少女の友』の編集長・内山基^{もと}の勧めで挿絵を描くようになる。大きな瞳に愛らしい服装の少女像は圧倒的な人気を集め、昭和10(1935)年1月号から昭和15(1940)年6月号まで同誌の表紙絵を担当するが、日本軍の圧力により降板する。昭和21(1946)年、婦人のための雑誌『ソレイユ』(後の『それいゆ』)、その翌年には姉妹誌として『ひまわり』を創刊し、編集者としても才腕をふるった。続いて創刊した『ジュニアそれいゆ』はカラーとグラビアを多用した編集で、多くのタレント発掘にもつなげ、プロデュース力を発揮。活躍の場は雑誌にとどまらず、日本のファッション、イラストレーション、ヘアメイク、インテリアなど幅広い分野で時代をリードした。

マルチアーティスト

人形作家、挿絵画家、編集者、ファッションデザイナー、スタイリスト、インテリアデザイナー、執筆、さらには若手スターのプロデュースに至るまで、淳一は様々な分野においてマルチな才能を発揮。そのセンスとメッセージは日本女性のライフスタイルに多大な影響を与えました。一貫して流れている独特な美学は、時代を超えて、人々を魅了してやみません。

淳一降板事件

昭和15(1940)年、淳一は軍部の圧力により突如として雑誌『少女の友』を降板することになります。淳一の描く少女が「健康な強い少女ではない」という理由からでした。看板画家の降板に、編集部には全国の少女たちから抗議が殺到。読者投稿欄にも「淋しい」といった声が多数寄せられ、その後の売り上げ部数にまで影響を及ぼしました。

タカラジェンヌとの結婚

昭和13(1938)年、宝塚歌劇団の機関誌『宝塚グラフ』の訪問インタビューの企画で、淳一は宝塚歌劇団の葦原邦子と対面。翌年5月、雑誌社の依頼で、引退する邦子をインタビュー。昭和15(1940)年には邦子の随筆集『葦笛』出版記念のポスターを淳一が手掛けました。スター同士の結びつきはマスコミでも話題となり、それをきっかけに11月、二人は結婚。その後、二男二女に恵まれました。

ヒマワリ社の設立

昭和21(1946)年に出版した婦人雑誌『ソレイユ』第一号が予想以上の売れ行きだったため、続けて出すことを決めた淳一は、編集員を募集して出版社「ヒマワリ社(のちの ひまわり社)」を組織化しました。編集部には若き才能が終結し、切磋琢磨しながら青春の日々を過ごしました。社名につけられた“ひまわり”(フランス語で「それいゆ」)は、淳一の一番好きな花でした。